



平成 21 年 12 月 30 日
第 210 号
清野新聞社

突然の電話(修)

年末近い十一月、守谷市広報誌に掲載された私の記事を読んだという人から突然の電話がありました。

守谷市は、〇八年に全国都市「住み良さランキング」で日本一になり少し知られるようになりましたが、首都圏最後の大規模ニュータウンといわれ、住民の出身地は全国各地に及び住民構成は日本の縮図とも言えます。そこに着目した

「ふるさと自慢」という出身地を紹介するコーナーがあり、市役所の友人から依頼されて書いたものです。

記事を読んで「昔お世話になった上芭露のSさんの子息ではないか」と聞かれて、記事には上芭露とはどこにも書いてなかったのでも即座に状況を理解しました。

HKさんはつくば市に在住で現在九〇才を超えているとのこと。実際のやり取りは息子のHRさん(七〇歳)と行いました。後日親父の回想録「オホーツクの大地に生きる」を贈ったところ「親父に

今日みせたところ、大変懐かしい様子でした。と同時に、昔のつらい毎日を思い出したのか、涙ぐんでいました。I伯父

さんとききをしたこととか、家が火事で焼けた時のこととか、長姉の方から、おっぱいを飲ませて頂いたこととか、時間がまちまちですが、沢山思い出されています。S家には、お世話になったようです。」とのこと。

親父にも電話で聞いてみると覚えていて、「火事に遭い、若くして両親を失い天涯孤独となって貧乏で苦労して育ったが、勉強ができて優等生だった」とのこと。

そんな苦労した人生もあるのかと感慨深いものがこみあげてきた。同時に温かい近所つき合いをしたS家を嬉しくちよつと誇りにも思いました。親父の回想録二十五頁にある「隣近所は仲良く、皆で助け合った」我が故

郷の開拓時代を少し理解できた気がしました。私も子供の頃、向かいの山へスキーに行った時など廃屋が残っていたことをかすかに思い出しました。

もうひとつ、息子のHRさんは道立遠軽高校から北大農学部と私の十二年先輩というのも偶然で、また驚きでした。

薄荷は、数年ではほぼ完全に生産されなくなり、村の風景は一変しました。現在は酪農が中心で、牧場には多くの牛がのどかに放牧されています。サロマ湖の湖畔には、春は「水芭蕉の群落」、初夏は「ハマナスやエゾスカシユリの原生花園」、秋には「サンゴソウの群落」が紅色のじゅうたんとなって埋め尽くし、見事な景観です。毎年6月に開催される鉄人レース「サロマ湖100キロウルトラマラソン」には、全国から2000人以上が参加します。7月に開催される「オホーツクサイクリング」は自転車でおホーツク海沿岸212キロを走り抜けます。いずれも雄大な北海道の大自然の中を走るコース設定がされていますので、健脚に自信のある方はぜひ参加してみてください。はいかがでしょうか。

みんなのひろば



ゆうべつちよう ほとり サロマ湖の畔 「湧別町」

ふるさと自慢



清野修さん (久保ヶ丘)

私のふるさととは北海道の東部、オホーツク海に面した湧別町です。国内では霞ヶ浦に次いで三番目の大きさとなるサロマ湖の周辺で、網走国定公園に指定されています。

サロマ湖は海とつながった汽水湖でホタテ、北海シマエビ、カキ貝などが名産です。

かつては清涼剤や医薬品として用いられた「ハッカ(薄荷)」の名産地で、大正時代から戦前の全盛時には「北見ハッカ」のブランドで世界市場の7割を占めるまでに成長し、薄荷御殿が建つなど栄えました。私の子どものころは秋になると薄荷の蒸留作業が行われ、村中に薄荷の清々しい香りが漂っていました。

昭和40年代、水田の減反政策が始まる少し前のころ、ブラジル産の安価な薄荷や合成メントールの出現、輸入自由化によって、村での

